

中国語を母語とする日本語学習者の和語動詞の使用 —KY コーパスの分析—

鷺見幸美

キーワード：中国語を母語とする日本語学習者 学習者コーパス 和語動詞 語彙習得
使用語彙

1. 本稿の目的

KY コーパス¹⁾を対象とし、中国語を母語とする日本語学習者がどのような和語動詞を使用しているかを観察し、学習者の日本語のレベル別に、動詞の使用頻度、動詞の多義性の観点から分析する。

2. 背景

中国語を母語とする日本語学習者は、一般的に、日本語の語彙学習において有利であるとされる。それは、日本語学習の困難点の一つである漢字・語彙の学習において、中国語の漢字・語彙の知識を活用することができるためだと考えられる。そのことから、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得については、さまざまな研究が行われてきている。陳（2003）は、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得研究について、対照研究、誤用分析、中間言語研究・言語心理学の流れで研究されていることを概観し、これまでの研究において母語の影響があることが確認されており、干渉するものもあれば促進するものもあると述べている。

一方で、日本語における和語の使用比率は、延べ語数で異なり語数に比して高いだけでなく、話し言葉において書き言葉に比して高い。林（1982）は、話し言葉の語種比率として、1）異なり語数においても延べ語数においても「公的生活」から「私的生活」に移るに従って漢語に比して和語の占める使用率が增大すること、2）異なり語数に比して延べ語数では漢語に比して和語の占める使用率が增大すること、3）異なり語数においても延べ語数においても高頻度語になるに従って漢語に対して和語の占める使用率が增大すること、4）書き言葉に比して、漢語に対する和語の使用率は、異なり語数においても延べ語数においても大きく、後者においては特に著しいことを指摘している²⁾。

日本語の運用、特に、話し言葉においては、和語の習得が重要であるが、中国語を母語とする学習者は、漢語に頼りすぎることにより、「和語の習得が十分に進まない」という可能性が考えられる。また、和語習得の研究は、漢語習得の研究に比べて少ない。

そこで、本稿は和語に注目する。

3. 先行研究

3.1 OPIデータに見られる日本語学習者の使用語彙

OPIデータを用い、日本語学習者の動詞使用を観察した研究に、稲熊（他）（2003）・櫻井（他）（2005）、金庭（2003）がある。いずれも、韓国語を母語とする日本語学習者を対象としたものである。

稲熊（他）（2003）・櫻井（他）（2005）は、韓国語を母語とする日本語学習者のOPIデータ³⁾を用い、各レベルで使用されている語彙を日本語能力試験の語彙表と照らし合わせて、その特性を明らかにすることを目指したものである。結果として、1) OPIの話し言葉では和語の比率が高く漢語の比率は低いこと、2) OPIのレベルが上がるにつれて漢語の割合は20%前後でそれほど変わらないが和語の割合は50%台から60%台に増加すること、3) 和語は上級以上でも4級の異なり語数が増え続け、4級の語彙を一番たくさん使用すること、などを明らかにしている。3)については、レベルが上がると割合として2級と3級の語彙が増え4級の語彙の割合が減ってくる漢語の場合とは対照的であると述べている。

金庭（2003）は、KYコーパスのうち韓国語を母語とする学習者のデータを用い、韓国語母語話者の動詞の使用状況から、動詞の習得について全体像を予測することを目指したものである。結果として、1) レベルの高い学習者ほど同じ動詞を多用していること、2) レベルの高い学習者が多用する動詞は各レベルに出現する共通の動詞「する」「思う」「ある」「なる」等であり、これらの動詞を含む用法の違いが習得過程に影響を与えていること、3) 初級にはどのレベルにも共通の動詞が出現し、さらに各レベルにふさわしい動詞が上乘せされ、増加していくという傾向があることから、動詞語彙の習得に難易度があって、自然な順序で習得されることが考えられると述べている。ただし、3)については、初級や中級でも、より高いレベルの学習者が使用していない動詞の使用が見られることに触れ、学習者の個別性、話題の特殊性、被験者の人数をその理由としている。

以上、稲熊（他）（2003）・櫻井（他）（2005）、金庭（2003）から、韓国語を母語とする学習者の話し言葉における動詞使用については、レベルが高くなっても、基本的な和語動詞が多用される傾向にあることがわかる。

3.2 中国語を母語とする学習者の使用語彙

作文データを対象とした研究では、中国語を母語とする学習者は韓国語を母語とする学習者よりも漢語の使用比率が高いことが指摘されている(李 2001、胡 2012)。胡(2012)

は、日本語学習者による作文データベース「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（オンライン版）」を利用し、日本語母語話者・中国人・韓国人・シンガポール人・アメリカ人・インド人による、同じテーマで書かれた作文（各10編・合計60編）を対象にして、漢語・外来語の使用比率を分析した。その結果、中国人学習者の漢語使用率（20.8%）が6カ国の中で一番高く、日本語母語話者（16.1%）に比しても高いことを明らかにしている。中国人学習者の1名は漢語使用率が32.4%で、日本語母語話者平均の倍である。外来語使用比率が日本人母語話者（0.9%）よりわずかに高い（1.4%）ことを踏まえても、この結果から中国人学習者の和語使用比率の低さがうかがえる。

実証的研究においても、中国語を母語とする学習者の和語使用に母語の影響があることが示されている。小森（他）（2012）は、中国語を第一言語とする日本語学習者を対象にし、漢語の中でも、日本語と中国語とで同義だとされている日中同形語20語に焦点を当てて調査を行い、中国語と同じ連語形式（保持传统／伝統を保持する）と、中国語と異なる連語形式（建设家庭／*家庭を建設する）、漢語でなく和語を用いた方が適切な連語形式（整理头发／*髪の毛を整理する／髪の毛を整える）について、どの程度正確に習得しているかを分析した。その結果、中国語と同じ共起語がとれない語については、日本語能力試験1級以上の超級者でも習得が進んでいないこと、中国語の知識を和語にも転用することを明らかにしている。この結果から、中国人学習者の母語知識が、日本語の和語使用にも影響を与えていることがうかがえる。

以上、胡（2012）、小森（他）（2012）から、中国語を母語とする日本語学習者は、和語動詞の使用についても、何らかの母語の影響を受けていることが想定できる。

4. 分析対象

本稿では、和語動詞の認定を以下の2つの基準により行い、分析対象語を定めた。

まず、訓読みする語を和語、音読みする語を漢語とした。ただし、「愛する」「頑張る」「適する」「属する」は、『IPAL』⁴⁾の見出し語となっていることから、分析対象語に含めた。次に、単純語、合成語を問わず、一語化している動詞を分析対象とした。一語化の認定は、『IPAL』『FDJ』⁵⁾『大辞林（第三版）』のいずれかで見出し語となっていることを基準とした。ただし、『大辞林（第三版）』で見出し語となっている「気にする」「気になる」「役に立つ」などの慣用表現は、動詞「する」「なる」「立つ」の一使用例とした⁶⁾。なお、敬語動詞は、分析対象としなかった。

5. データ処理・分析の手順

- 1) タグ付き KY コーパスを利用し、学習者レベル（初級・中級・上級・超級）ごと

に、品詞【動詞】・意味分類【全て】で検索し、検索結果をエクセルファイルでダウンロードする。

2) データを手作業で修正・削除する

- ・品詞や語形の誤判断を修正・削除する。：(例；おきる：置く(誤)→修正：起きる／あるとき：とく(誤)→削除／なおします：する(誤)→修正：なおす、～たり：たる(誤)→削除／～とかね：かねる(誤)→削除／煙りがすみずみまで：煙る(誤)→削除、すみずみ：すむ(誤)→削除、それから：それる(誤)→削除 等)
- ・敬語動詞(いたす／いただく／いらっしゃる／おっしゃる／おる／くださる(ください)／ござる(ごさいます)／ご覧／なさる(なさい)／参る／召し上がる／申し／申し上げる)を削除する。
- ・「られる」(受身・可能・尊敬)、「せる」(使役)を削除する。
- ・補助動詞として使用されているもの(「-てV」(-ている／おく／あげる／もらう／くれる／みる／しまう(ちゃう)／いく／くる)を削除する。
- ・助動詞(の構成要素)として使用されているもの(-みたいだ／かもしれない／なければならない／なければいけない／てはけない 等)を削除する。
- ・複合助詞(の構成要素)として使用されているもの(にとって／をとおして／につれて／について／により 等)を削除する。
- ・接尾辞として使用されているもの(-かねる／きれない／すぎる／つづける 等)を削除する。「接尾辞」の判断は、『学研国語辞典(第二版)』⁷⁾に基づく。

3) 同音異義語であるか、多義語であるかを、『IPAL』に従って便宜的に判断する⁸⁾。

- ・『IPAL』で一語とされていれば、『FDJ』では複数語とされていても、一語とする。例えば、「あく(空く・開く・明く)」「たつ(立つ・経つ)」「つく(付く・着く)」「つとめる(勤める・努める)」等を『IPAL』に従って一語とする。
- ・『IPAL』で一語とされていれば、『FDJ』で記載されている英訳(の数)にかかわらず、一語とする。例えば、「つる(hang)」「しめる(tie, tighten)」等を『IPAL』に従って一語(「つる(釣る・吊る・攀る)」「しめる(閉める・締める・撃める・搾める)」)とする。

4) 使用和語動詞一覧を作成する。

5) 各使用和語動詞の使用頻度順位を『FDJ』に基づき特定する。一語とした動詞が『FDJ』では複数語とされている場合は、上位の方をその語の順位とする。

6) 各使用和語動詞の語義数を『IPAL』に基づき特定する。

6. 分析・考察

6.1 使用和語動詞数

各レベルで使用されている和語動詞の異なり語数を表1に示す。

表1 使用和語動詞の異なり語数

	初級（5名）	中級（10名）	上級（10名）	超級（5名）
総数	35	167（含誤用14） ⁹⁾	253（含誤用9）	179
1人当たり	7.0	16.7	25.3	35.8

初級から超級へとレベルの上昇とともに、1人当たりの使用動詞数が増加している。注目したいのは、中級で使用動詞のバリエーションが急激に増加している点、また、誤用が最も多い（誤用の比率が最も高い）のが中級である点である。使用動詞の急増とともに、まだ安定した使用には至っていない使用が多くなることがうかがえる。

6.2 使用和語動詞の種類

使用されている和語動詞の種類を表2、表3、表4に示す。まず、表2には、あるレベルで使用され、それ以上の全てのレベルでも使用されている動詞を挙げる。

表2 使用和語動詞の種類（1）

初級・中級・上級・超級で使用されている動詞（28動詞）
ある・行く・いる・起きる・教える・終わる・かえる・かかる・書く・考える・頑張る・来る・住む・する・食べる・違う・作る・泊まる・なる・寝る・飲む・乗る・働く・話す・見る・持つ・読む・分かる
中級・上級・超級で使用されている動詞（43動詞）
合う・あげる・遊ぶ・合わせる・言う・入れる・受ける・怒る・覚える・思う・おりる・かける・変わる・感じる・聞く・比べる・困る・死ぬ・知る・出す・たつ・たてる・頼む・使う・疲れる・付き合う・つく・つける・つとめる・連れる・できる・出る・通る・とる・慣れる・入る・流行る・見える・もらう・休む・やめる・わかる・忘れる
上級・超級で使用されている動詞（29動詞）
続く・始まる・求める・進む・回る・のぼる・通う・歌う・過ぎる・見つける・座る・学ぶ・育てる・育つ・分ける・勤める・くれる・足りる・戦う・遅れる・支払う・取り入れる・任せる・間違える・招く・叱る・尽くす・言える・行ける

初級から、中級、上級・超級へとレベルが上がるにつれて、使用動詞が積み上がっていく形で増加していくことがうかがえる。

次に、中級、上級、超級の各レベルでのみ使用されている動詞を、表3に挙げる。

表3 使用和語動詞の種類(2)

中級で使用されている動詞 (47 動詞)
あたためる・当たる・当てる・洗う・急ぐ・落ち着く・驚く・泳ぐ・かえす・貸す・借りる・切る・混む・壊す・信じる・立ち上がる・潰れる・つる・釣れる・出掛ける・出来上がる・亡くなる・投げる・煮る・盗む・のせる・離れる・弾く・防ぐ・振り込む・干す・磨く・向ける・呼ぶ・沸く・渡す・笑う・あける(誤)・かむ(誤)・つかまえる(誤)・流れる(誤)・並ぶ(誤)・並べる(誤)・巻く(誤)・待ち合わせる(誤)・破く(誤)・破れる(誤)
上級で使用されている動詞 (115 動詞)
やる・戻る・始める・残す・与える・楽しむ・向かう・変える・認める・含む・見せる・起こる・過ごす・越える・思い出す・守る・落ちる・伝える・集まる・振り返る・似る・喜ぶ・繰り返す・飼う・殺す・失う・生じる・占める・運ぶ・効く・まとめる・応じる・逃げる・近づく・押さえる・通じる・支える・抱える・伝わる・咲く・向く・受け入れる・なおす・下がる・もうける・たまる・そろう・下げる・及ぶ・諦める・黙る・目立つ・倒れる・握る・迷う・なくす・耐える・属する・絞る・確かめる・ほめる・覆う・揃える・埋める・植える・盛り上がる・作り出す・受かる・ぶつかる・飽きる・ゆでる・引き上げる・割る・鍛える・届ける・稼ぐ・絡む・適する・携わる・探る・雇う・組み合わせる・取り付けるとける・譲る・取り除く・取り扱う・攻める・倒す・劣る・担ぐ・貫く・祝う・歩む・案じる・競う・凍る・こみ上げる・逆らう・積み重ねる・話せる・ばらす・掘り下げる・全うする・見当たる・蒸す・やって来る・動く(誤)・負ける(誤)・外す(誤)・おさめる(誤)・おさまる(誤)・曲げる(誤)・くすぶる(誤)・とけ込む(誤)
超級で使用されている動詞 (64 動詞)
得る・おくる・はかる・泣く・目指す・なす・捨てる・伴う・減る・表す・渡る・悩む・たたく・助ける・果たす・生かす・結ぶ・もたらす・間違う・達する・望む・寄る・思い切る・あり得る・断る・減らす・話し合う・話しかける・助かる・飲める・燃える・受け止める・持ち込む・見守る・こだわる・汚れる・いじめる・かわいがる・足す・誇る・放る・ずれる・見送る・あたたまる・甘やかす・ありつく・売りさばく・かじる・かなう・さしかかる・さびれる・親しむ・しのぐ・閉まる・助け合う・つむる・出向く・得する・怠ける・濁る・ほげる・よす・酔っぱらう・弱まる

中級でのみ使用されている動詞が47語あり、中級167語のうちの28.1%を占めている。約3割の動詞が中級でのみ使用されていることを考えると、必ずしも「中級は、上級・超級に比べてバリエーションが少ない」とは言えない。話題による影響、あるいは環境などの影響による個人差と見なしたほうがいいのではないだろうか。ただし、使用された和語動詞の総数が上級、超級に比べて明らかに少ないため、さらに上のレベルの使用する語彙とどのような違いがあるのかを、次節以降で考察したい。

最後に、表2、表3に挙げられていない動詞を、表4に挙げる。

表4 使用和語動詞の種類(3)

初級・中級・上級で使用されている動詞(3動詞)
生まれる・買う・待つ
初級・中級で使用されている動詞(1動詞)
習う
初級・上級・超級で使用されている動詞(2動詞)
着る・走る
初級・超級で使用されている動詞(1動詞)
止まる
中級・上級で使用されている動詞(33動詞)
愛する・会う・あく・集める・謝る・歩く・生きる・炒める・要る・置く・勝つ・決まる・決める・暮らす・壊れる・探す・従う・閉める・しゃべる・調べる・続ける・手伝う・通す・取り上げる・なくなる・払う・引く・ひらく・混ぜる・焼く・上がる・知り合う・取れる
中級・超級で使用されている動詞(12動詞)
売る・起こす・行なう・片付ける・答える・誘う・吸う・なおる・残る・乗り換える・増える・許す

中級・上級で使用されていて超級で使用されていない動詞が33語存在することについては、超級の話者数が中級・上級の話者数より少ないこと(つまり、データ量が少ないこと)の影響も考えられるが、表3、表4からは、動詞の習得については、「レベルの上昇により積み上がる」、つまり、「動詞語彙の習得に難易度があって、自然な習得順序で習得される」(金庭:2003)だけでなく、学習者の個人差もかなりあると言えるのではないだろうか。

ここで、中級の誤用に注目したい。前節で見たように、中級は誤用の比率が最も高い。以下の(1)では自他の混用、(2)では母語の知識の負の転移が見られる。

- (1) CIH02: たかいのものは、〈はい〉あの一、ボールをそのなかに投げて、〈ええ〉もし当たる、入れます、〈はい〉あの、ボールは、いれ、たら、点数が、あげます
T: 点数があがる
CIH02: はいはい、あがる、〈うん〉
- (2) CIM01: (前略)〈えーえー〉窓のほうは一、〈ええ〉ガラス一、やぶいちゃう、少しや、やぶれ、やぶれた一、みたい、破れたんですね、〈はーはーはー〉それで一、〈ええ〉窓から、〈ええ〉はい、はいつたみたいです、〈あはい〉けどー

(1)は、自他の使い分けができず、インタビュアー(T)の指摘により自己訂正している。(2)は、「やぶれる」の意味理解が十分ではなく適用範囲を理解していないこと、中国語で「玻璃破(ガラスが破れる)」と言えることに起因する誤りだと考えられる。

6.3 使用和語動詞の使用頻度

どのような使用頻度順位にある和語動詞が使用されているかを、表5にレベル別に表示す。使用頻度順位は、『FDJ』に基づく。

表5 使用和語動詞の使用頻度順位

使用頻度順位	初級	中級	上級	超級
上位10語	7 (20.0%)	9 (5.4%)	10 (4.0%)	9 (5.0%)
上位20語	11 (31.4%)	19 (11.4%)	20 (7.9%)	19 (10.6%)
上位30語	14 (40.0%)	27 (16.2%)	27 (10.7%)	27 (15.1%)
上位40語	19 (54.3%)	36 (21.6%)	36 (14.2%)	35 (19.6%)
上位50語	23 (65.7%)	45 (26.9%)	44 (17.4%)	43 (24.0%)
上位100語	30 (85.7%)	69 (41.3%)	77 (30.4%)	61 (34.1%)
上位200語	32 (91.4%)	95 (56.9%)	114 (45.1%)	83 (46.4%)
上位300語	33 (94.3%)	115 (68.9%)	143 (56.5%)	105 (58.7%)
上位500語	35 (100%)	135 (80.8%)	175 (69.2%)	125 (69.8%)
上位1000語		157 (94.0%)	218 (86.2%)	148 (82.7%)
上位1500語		162 (97.0%)	234 (92.5%)	156 (87.2%)
上位1528語 ¹⁰⁾			235 (92.9%)	
記載なし		167 (100%)	253 (100%)	179 (100%)

使用頻度の高い動詞は、初級レベルから使用されており、レベルが上がることにより、使用頻度の低い語も使用されるようになることがわかる。

初級では、上位40語の動詞だけで使用の50%を越えるが、中級では上位200語、上級・超級では上位300語で50%を越える。初級は、上位50語の動詞、100語の動詞、200語の動詞が、全体の65.7%、85.7%、91.4%を占め、101位以下の動詞で使用されているのは5語に過ぎないことから、ほぼ、使用頻度の極めて高い、上位100語の動詞のみを使って話していることがわかる。

中級では、上位100語の動詞、200語の動詞は、全体の41.3%、56.9%に過ぎず、初級からの語彙量の増加が明らかである。しかし、上位500語で80%、上位1000語で約95%に達し、上位101語から300語までの200語のうち使用しているのが46語、301語から500語までの200語のうち使用しているのが20語であることから、その増加の中心は使用頻度の高い動詞であり、主に、使用頻度の高い語を使用して話していると言える。

前節で「中級は、上級・超級に比べて使用動詞のバリエーションが少ないとは言えない」と述べたが、表5からは、中級、上級、超級の違いも見えてとれる。中級は、上位1000語で使用のほぼ95%を占めるが、上級・超級では上位1528語でも95%には満たない。上級・超級は、『FDJ』に記載されていない和語動詞が、それぞれ18語(7.1%)、23語

(12.8%) 使用されている。中級と上級・超級の違いは、使用頻度の低い動詞の使用にあると言えそうである。

使用頻度上位 10 語については、初級でも 7 語が使用されている。初級で使用されていないのは、「言う」(1 位)、「思う」(2 位)、「やる」(9 位) の 3 語である。初級では、「言う」や「思う」を用いて発話内容や思考内容を言語化することがまだできないこと、「する」と「やる」を使い分けていないことがわかる。「考える」(14 位) は、発話・思考動詞であるが、活用に誤りはあるものの、初級で使用されている。ただし、その使用は内容節を伴った使用ではない。

(3) T: (前略) 西安に帰ってからも、広告のデザインをしますか

CNH01: えーん、今、〈え〉まだ一、〈え〉あの、ちゃんと一考えしませんです

中級では、上位 50 位の動詞のうち、対象としている動詞で使用していないのは、「やる」のみである¹¹⁾。中級でも、「やる」と「する」の使い分けには至っていないことがわかる。初級では使用されていなかった、使用頻度 1 位、2 位の動詞「言う」「思う」は、内容節を伴った使用が見られる。

(4) CIH01: うん、〈ん一〉先生、たとえば、さっきは一、そのボランティアのこと、おつかれさまでした一と、言ったら わたしは何か答えたほうがいいか

(5) CIH03: それから、あの野菜を入れて、〈ん〉いためて、〈ん〉んーなんか、火が、あの強くて、〈ん一〉そのほうがおいしい、と、思います、

「やる」は、上級学習者は 10 名全員が使用しているが、超級では使用が見られない。上級での「やる」の使用は、(6) のように「する」に置き換えられるもの、(7) (8) のように置き換えられないもの、(9) のように置き換えにくいもの、いずれも見られる。

(6) CAH03: いやーどこ一行かれたもいうても、昔、ちゅうごくおった時はやっぱり山登りとか、〈うん〉もよく一やりました、

(7) CA03: 愛するの心、〈あ一、愛する心〉昔よりすくなーくなるようになっているね、そうすると、毎日動物餌をやって、

(8) T: 一年半ですね一、えー忙しいですか毎日

CAH05: 忙しいと言えば忙しいですけども、ん一、ん一、ま一何とか、やっていくという 笑い

(9) T: うーんその会社はだけどちょっと給料が安い、今ね、〈うん〉毎月ね、あ

の35万円なんだけどね、〈はい〉そこは30万円でね、〈うん〉だけど仕事がね、あのいいみたいなの

CAH02: でもやってみないとわからないでしょ

使用頻度51～100位の対象としている動詞のうち、初級・中級では使用が見られず、上級、超級、上級と超級で使用されているのは、「続く」(59位)、「得る」(62位)、「戻る」(64位)、「始める」(67位)、「残す」(68位)、「始まる」(70位)、「与える」(73位)、「楽しむ」(80位)、「送る」(84位)、「向かう」(89位)、「変える」(91位)、「求める」(93位)、「認める」(100位)の13語である。また、いずれのレベルでも使用されていないのが、「選ぶ」(63位)、「示す」(87位)、「願う」(88位)の3語である。これらの動詞¹²⁾が使用されない原因は不明だが、「得る」「与える」「求める」「認める」については、比較的確い話題に出現すると考えられ、話題の影響もあるのではないかと考える。

以上、使用頻度の観点からは、初級では使用頻度の極めて高い上位100語の動詞を使用していること、中級では初級より語彙量は増加するが、その増加の中心は使用頻度の高い動詞であること、それに対して上級・超級では使用頻度の低い動詞も使用するようになることが明らかになった。

6.4 使用和語動詞の多義性

使用されている和語動詞の多義性を検討する。使用された動詞がいくつの語義を持つかを、表6にレベル別に示す。語義数は、『IPAL』記載のサブエントリ数に基づく。

表6 使用和語動詞の語義数

語義数	初級	中級	上級	超級
31～40		1 (0.6%)	1 (0.4%)	1 (0.6%)
21～30	1 (2.9%)	7 (4.2%)	7 (2.8%)	7 (3.9%)
11～20	7 (20.0%)	19 (11.4%)	20 (7.9%)	12 (6.7%)
6～10	6 (17.1%)	33 (19.8%)	50 (19.8%)	30 (16.8%)
2～5	19 (54.3%)	84 (50.3%)	129 (51.0%)	83 (46.4%)
1	2 (5.7%)	10 (6.0%)	13 (5.1%)	13 (7.3%)
記載なし		13 (7.8%)	33 (13.0%)	33 (18.4%)

初級で使用された35語のうち、単義語は2語であり、使用されている和語動詞のほとんどが多義語である。基本的な語は多義的な語が多いことを考え合わせるならば、初級学習者の使用和語動詞の多義性が高いということは、初級学習者は基本的な語を使用しているということになる。単義の2語は、「住む」と「頑張る」である。

初級、中級、上級、超級の単義語の使用比率はあまり違いがないが、中級、上級、超

級では単義語と『IPAL』に記載されていない語の使用を合わせると、それぞれ13.8%、18.1%、25.7%であり、レベルの上昇とともにその比率が高くなっている。このことから、より低いレベルはより基本度の高い語を使用していることが確認できる。

ここで、多義性の高い動詞の使用を見てみる。初級で使用されている和語動詞の中で最も多くの29の語義を有する「かかる」は2人の学習者が使用しているが、いずれも『NTT』¹³⁾で記述されている33の語義¹⁴⁾のうち、単語親密度が最も高い「費用や時間などが必要とされる。費やされる。」という語義で使われている(親密度5.125)。

(10) CNH01: とてもー、寒い、です、えーあの、〈あ〉時間もかかります、あの遠いですから、〈えーえ、えーえー〉んー、2時間ぐらい、〈ええ〉かかります

(11) CNH02: ちょっと高いですねえ、〈ああ〉あーっと、ご、五千円、〈あ、五千円〉ご、ごせんんに、あ、かかっ、あー、かかります、

中級、上級、超級では、それぞれ5名、6名、2名の学習者が使用しているが、いずれも初級での使用と同じ語義での使用である。

15の語義を有する「作る」も2人の初級学習者が使用しているが、いずれも『NTT』で記述されている13の語義のうち、単語親密度が最も高い「原料や材料や素材などに手を加えて、目的のものに変える。」という語義で使われている(親密度5.850)。

(12) T: じゃあ、あのー、えー、あなたは、きょう餃子を作りましたか

CNH01: はい、餃子ーは作ります

(中略)

CNH01: えーほかにーは、〈ん、ん〉あのちゅっか料理も、〈ええ〉作ります

(13) CNH02: (前略) 友達の、〈うん〉アパートに、はな、あー、会話を、〈うん〉会話をしました、〈はい〉あー、晩御飯をつくりました、

中級では9名に使用されており、初級と同じ語義での使用の他、(14)(15)のような別の語義での使用も見られるが、(16)のような誤用もされている。

(14) CIH03: (前略) えー香港はこれは、香港と中国の監督で、〈ん〉この物語について、映画を、〈んー〉つく、あの作りました、そして、結構人気があります

(15) CIH01: そうですねー、ダイレンの町は、昔、聞くところによると、〈ええ〉日本人作ったので、〈うん〉日本風の町、です、〈へー〉うん

(16) CIL02: (前略) えー7時半ごろ、〈はい〉起きますから、ちょとーパンあ焼い

て、コーヒーも一、作り旦那さんと一緒に食べます、

上級では7名、超級では4名に使用が見られた。(17)(18)のような抽象的な語義での使用は、中級までではなかったものである。

(17) CA02:(前略)あの日本へ来て、まだ、いろいろの資本主義の知識とか、あの、社会のあり方、あの、経済の仕組み、それを勉強して、あの、中国と日本の良いこと、組みあわせて、将来あの、良い世界を作りたいと思います

(18) CS01:あ、えー、Tさんの、今もう既に、家庭をつくっていて、お子さんがふたりも、もういますのに、まだ一大学院にはいって、(後略)

以上、多義性の観点からは、初級で使用されている語のうち単義語は2語のみで、使用のほとんどが多義語であることが明らかになった。また、単義語と『IPAL』に記載のない語の使用比率からも、より低いレベルはより基本度の高い語を使用していることが確認できた。

また、「かかる」のようにレベルが高くなっても使用語義が増加しない動詞も、「作る」のようにレベルが高くなると使用語義が増加する動詞もあることがわかった。いずれも、初級で使用されているのは、単語親密度が最も高い語義であった。

7. まとめと今後の課題

本稿では、KY コーパスを用い、中国語を母語とする学習者が使用する和語動詞のレベル別一覧を作成し、動詞の使用頻度、多義性の観点から分析した。

本稿の問題点は、大きく3点ある。まず、KY コーパスを用いてレベル別の使用を見たとはいえ、1人ずつ縦断的に見ているわけではなく、習得プロセスを考察するには不十分である。次に、中国語話者の使用のみを見ており、他言語話者との比較をしておらず、中国語話者の特徴を考察するには不十分である。最後に、語義別の使用を見たのは「かかる」と「作る」のみであり、レベルの上昇に伴う使用語義の拡大を考察するには不十分である。これらの問題点を踏まえ、今後は縦断的なデータ、日本語母語話者や他の言語を母語とする学習者のデータを用いて、多義動詞の語義別の使用にも着目し、「中国語話者は和語習得が十分に進まない可能性」について考察していきたい。

注

- 1) KY コーパスは、中国語・英語・韓国語を母語とする学習者各 30 名、計 90 名の OPI テープを文字化した言語資料である。各 30 名は、初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名から成る。OPI (oral proficiency interview) は、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages : 全米外国語教育協会) によって開発された外国語の口頭運用能力を測定するためのインタビューテストである。
- 2) 書き言葉では、以前に比べ漢語の比率が高まっている。1967 年の雑誌 90 種を対象とした語彙調査 (国立国語研究所) では、延べ語数では和語 (53.9%) が漢語 (41.3%) を上回るが、異なり語数では漢語 (47.5%) が和語 (36.7%) を上回る。しかし、1994 年の雑誌 70 種の調査では、延べ語数でも漢語 (45.9%) が和語 (41.5%) を追い越している (宮島:2007)。また、山崎 (2013) では、2011 年公開の『現代書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) では、全体異なり語数において漢語 (43.59%) が和語 (32.98%) を上回り、BCCWJ 全体延べ語数においては、和語 (49.69%) が漢語 (43.52%) を上回ることが指摘されている。延べ語数においては、和語の使用比率が漢語より高いとはいえ、その差は 1967 年の調査時より小さくなっている。
- 3) 稲熊 (他) (2003)・櫻井 (他) (2005) は、独自に集めた OPI データを使用している。
- 4) 『IPAL』は、『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs)』を指す。日本語の動詞のうち語彙体系上ならびに使用頻度上重要であると考えられる基本的な和語動詞 861 語が取り上げられている。一般の辞書の「見出し語」にあたるものを「エントリ」とし、それを意味および統語的特徴に基づいて下位区分したものを「サブエントリ」とする。個々のエントリについて、意味および統語的特徴のいずれか一方に相違が認められれば、別エントリとされている。エントリの立て方は、『新明快国語辞典』(三省堂) の見出し語の立て方が参考にされており、同語源の形式を一つのエントリ (一語) とする傾向にある。
- 5) 『FDJ』は、英語を母語とする日本語学習者のための現代日本語の頻度辞書 “A Frequency Dictionary of Japanese : Core Vocabulary for Learners” を指す。『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) の模擬講演部分と『現代話し言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の全体を利用して、頻度情報を得て、上位 5000 語を掲載している。
- 6) タグ付き KY コーパスでは、それぞれ「する」「なる」「立つ」が動詞として検索されるため、便宜的にそのように定めた。
- 7) 『学研国語大辞典 (第二版)』では、品詞情報として、接尾語として使用される形式・語義には、《接尾》と記されている。
- 8) 国広 (1997 : 189) に、「同音異義か多義かの判定基準は、現時点で意味的関連があるか否か、ということであるが、かなり判定者の主観に左右される面がある。語源的に同一語であったということは判定材料にしない。あくまでも現時点の状況に基づく。(中略) 異なる訓漢字を使うことは別語扱いの根拠とはならない。」とある。本稿は、注 4 に記したように、『IPAL』が同語源の形式を一語とする傾向にあることを認識した上で、同音異義か多義かの判断は、あくまでも便宜的に、『IPAL』での認定に従うこととした。
- 9) 活用の誤用については誤用にカウントしない。
- 10) 『FDJ』記載の 5000 語のうち、1528 語 (サ変動詞を含む) が動詞である。『FDJ』無記載の語は、使用頻度順位が全体で 5001 位以下、動詞で 1529 位以下ということになる。

- 1 1) 上位 50 動詞のうち、使用されていない他の 4 語は、漢語サ変動詞 3 語と「ございます (ござる)」である。
- 1 2) 旧日本語能力試験出題基準に照らし合わせてみると、上級か超級で使用された 13 語のうち、4 級語彙が「始める」1 語、2 級語彙が「得る」「与える」「求める」「認める」の 4 語、その他の 8 語は 3 級語彙である。また、いずれのレベルでも使用されていない 3 語は、「選ぶ」が 3 級、「示す」「願う」が 2 級語彙である。したがって、教室習得をしている学習者であれば、既習の語彙である可能性は低い。
- 1 3) 『NTT』は、『基本語データベース 語義別単語親密度 I・II』を指す。『学研国語大辞典 (第二版)』から抽出した約 2 万 8 千語の収録語について、表記、単語親密度、語義文、品詞が語義エンタリー別に記述されている。単語親密度は単語のなじみの程度を複数の評定者が 7 段階で評定したときの平均値であり、数値が高いほどなじみの程度が高いことを表す。
- 1 4) 『NTT』は、語義エンタリーとその語義文も『学研国語辞典 (第二版)』に基づいており、それぞれの語について認定している語義エンタリー数 (語義数) は『IPAL』のサブエンタリー数 (語義数) とは異なる。

付記

- ・本稿の分析は、タグ付き KY コーパス (<http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/>) を利用させていただいた。
- ・本稿は、平成 22-26 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) (課題番号 2252527) による研究成果の一部である。

参照資料

- NTT コミュニケーション基礎科学研究所 (監修)・天野成昭・小林哲生 (編著) (2008) 『基本語データベース 語義別単語親密度 I・II』学習研究社。
- 金田一春彦・池田弥三郎 (編) (1988) 『学研国語大辞典 (第二版)』学習研究社。
- 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社。
- 情報処理振興事業協会技術センター (1987) 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs) 一辞書編一』。
- 松村明 (2006) 『大辞林 (第三版)』三省堂。
- Yukio Tono, Makoto Yamazaki, Kikuo Maekawa (2013) “A Frequency Dictionary of Japanese : Core Vocabulary for Learners” Routledge.

参考文献

- 稲熊美保・呉智恵・菊竹恭子・斉藤麻子・櫻井恵子 (2003) 「韓国入日本語学習者の使用語彙の分析—和語を中心として—」ソウル OPI 国際シンポジウム発表ハンドアウト, 59-63.

- 金庭久美子 (2003) 「韓国語母語話者の動詞の使用状況」『横浜国立大学留学生センター紀要』10、53-66.
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店.
- 胡曉睿 (2012) 「日本語学習者の作文における漢語の使用について」『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』香港日本語教育研究会.
- 小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子 (2012) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得」『小出記念日本語教育研究論集』20、49-60.
- 櫻井恵子・斉藤麻子・稲熊美保・呉智恵・菊竹恭子 (2005) 「韓国人日本語学習者の使用語彙の分析」『日本学報』64、75-86.
- 陳毓敏 (2003) 「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観：意味と用法を中心に」『言語文化と日本語教育増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線』96-112.
- 山崎誠 (2013) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』語彙表 ver.1.0 解説」2013.3.26.
- 林大 (監修) ((1982) 『図説日本語 グラフで見ることばの姿』角川書店.
- 宮島達夫 (2007) 「語彙調査からコーパスへ」『日本語科学』22、29-46.
- 李漢燮 (2001) 「韓国人学生の日本語作文における語種の選択について」『日本語教育のためのアジアの諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成 11-12 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 課題番号 1691041 研究成果報告書、研究代表者：前田 (宇佐美) 洋、46-50.